

SY2-2

不登校と子どもの貧困－貧困問題がつくり出す“通いづらさ”に着目して

直島 克樹

川崎医療福祉大学医療福祉学部 医療福祉学科

【はじめに】

学校に通うことが難しい子どもたちの中に、貧困問題が存在することは珍しいことではない。むしろ、近年大きな社会問題として顕在化された子どもの貧困問題の実態は、不登校を子どもの心や家庭の問題として一元的に理解しがちな傾向に、見直しを迫るものでもある。本報告では、子どもの貧困の実態に触れ、学校への“通いづらさ”とどのように関連していくのかを考察するとともに、求められる支援の展望についても示していきたい。

【子どものいる世帯の困難さと子どもへの影響】

子どものいる世帯の大半は共働きへと変化している一方、世帯の所得自体は低下しており、そのことは子育て世帯に影響を与えている。例えば、岡山県が実施した子どもの貧困に関する実態調査（2017年11月）において、調査対象の約4世帯に1世帯が「貯蓄の余裕がない」、そして「経済的な理由で必要な食料や光熱費等の支払いが出来なかった経験がある」と答えている。

子どもに影響を与えるのは経済的な問題だけではない。親が昼も夜も働かざるを得ず、心身ともに病んでいく姿や、孤立、家事などの負担、困難なほど複雑な社会制度と偏見の中で生活していかなくてはならない状況などは、確実に子どもの生活習慣、人間関係、学力、希望などに影響を与え、学校への“通いづらさ”を増幅させていく。子どもの貧困の視点に立つとき、不登校という事実は貧困の影響が具体化されるプロセスとも考えられる。

【求められる支援の展望：信頼と権利の回復、ケアと社会変革への働きかけ】

貧困は、他者や社会に対する信頼、安心を奪っていく。貧困状態にある子どもたちの諦めや無気力は、大人や社会に対する諦めでもある。これを取り戻していくような、信頼や安心を紡ぐことのできる仕組みづくり、地域づくりが必要である。その中で、ケアを基盤としつつ、子どもの可能性を拓く“縁”をつくり出すことも求められる。

同時に、子どもの成長を保障する機能が市場論理の中で支えられていく中で、貧困であることは、子どもや家族に対する社会保障体系等が脆弱なこの日本において、確実に子どもの権利を奪っている。柔軟性を欠いた教育システムは確実に子どもや家族の困難を増幅させている。ケアという視点のみならず、医療や教育、福祉などの専門職ネットワーク、さらには市民のネットワークが一致団結し、社会の仕組みに対するボトムアップの働きかけを強化していくこともまた、今後の大きなミッションと考えなくてはならない。